

解答はすべて(その七)の解答用紙に記入しなさい。

主人公の隆は、母親と共に交通事故にあい右足に義足をつけている。事故から一年近くたって、亡くなった母親の遺骨を沖繩へ運ぶため、父親の洋介といっしょに自転車で旅をしている。次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

隆はよほど疲れたのか、あの猫を見たせいなのか、部屋まで運んでもらった夕食にもほとんど箸をつけなかった。シヤツとズボンをぬぎ、民宿の浴衣を体にきっちりまいて早々と布団のなかにもぐりこんだ。まくらもとには隆の右足がごろりと転がっていた。

吸着式の精巧な義足だ。

見なれた光景だったが、洋介は隆のまくらもとに置いてある義足をセイシシすることがなかなかできない。セイシシしなければ逃げていくことになる、むきになって見ようとするのだが三分と持たなかった。

洋介は部屋をそっと抜け出て玄関わきの食堂に行った。

厨房の窓口から顔をのぞかせ、なかで後片づけをしている宿の女将にビールをたのんだ。

「隆君は、もうおやすみですか」

ビールとコップ、それにイカの塩辛の小鉢をテーブルの上にそっと置いて女将はつぶやくようにいった。

「よほど、疲れたらしい。何といつてもずっと家に引きこもりで、外にどここ数ヶ月出たことのない子だから」

女将は洋介のコップにビールを満たした。

「交通事故ですか……」

と(1) いった。

「ああ。一年ほど前にトラックとぶつかって右足の膝下を切断した」

洋介はビールを一息で飲んだ。

「まあ」

といったときり女将はだまりこんでから、

「何年生？」

とかすれた声できいた。

「学校へ行つてれば、この春から中学一年なんだけど、さっきもいった通り、ずっと引きこもりで登校拒否だからね」

「……」

「だから、二人で全国行脚です。あいつの生きようとする気力が、何とかそれで出てこないかと思って」

とことさら(2) いった。

「きつと出てきますよ。まだ若いんだもの。出てこないわけがありませんよ」

空いたコップにビールを注いだ。

「そうだといいんですがね」

洋介はまた一気にビールを飲みほした。

「もう半分は治ってるじゃないですか。こうして外に出て自転車で走ってるんですから」

それもそうだ。cゲンミツにいえば隆はもう引きこもりではないのだ。症状は確実にdコウテンしている。

「しかし、あの通り、ほとんど口をきかない状態ですからね」

洋介は手酌でコップにビールを注いだ。

「申しわけありません。シロのせいです。隆君がシロを見なければ、あんなに暗くなることは

なかったかもしれません」

女将は思いきり洋介に頭を下げた。

「そんなことはない」

洋介は(3) いった。大声だった。

「あれはいい薬だと私は思っています。あの体で、それでも健気に生きている子猫を見て胸を打

受検番号	
------	--

たれない人間はいません。あの猫を見て隆は今 心のなかで闘っているはずで。自分の境遇に照らしあわせて。必ずプラスになるはずで」

「そういつてもらえれば」

と女将がいった。

次の日、九時近くになっても隆は出立のそぶりを見せなかった。横座りになって、両側の窓から外をじっと見ていた。義足はちゃんとつけていた。

外は昨日と同じように雨が降っていた。

「隆。今日もここで泊まっていくか」

隆が初めて洋介の顔を見た。かすかに首を縦に動かした。

「どうせ外は雨だろうから体に悪いしな。急いでいる旅でもないし。だけど、天気がよくなったら旅館に泊まるなんてぜいたくは許されないからな。ちゃんとテントも持ってきてるし、お父さんは決してお金持ちじゃないから、節約できるところは節約せんとな」

またこくつと隆は首を縦に振った。

隆があつ猫のことを気にしているのはわかりきっていた。出立の意思を見せないのはそのせいだ。自分と同じ境遇の猫なのだ。決して天気などのせいではない。

「どうだ。下へ行って、あの猫を探してみるか」

どんな反応を隆が示すのか見当もつかなかったが、思いきっていつてみた。

「うん」

かすれた声を隆は出した。

「そうか。じゃあ行く」

洋介は 弾んだ声を出し、隆が立ちあがるのを待った。足首に直接力をいれることができない義足は、なかなか立ちあがるのが難しい。が、けっこう器用に隆は立ちあがった。(A) という願望が、普段より強い精神力を隆の心に湧かせているにちがいない。

ゆっくりと引戸を開けた。

物置のなかはけっこうきれいに片づいている。使わなくなった調度類や家具の類、調理用だと思われる炭や食器の類などが 堆くつまれてあった。

そのなかに古い座布団で周りを囲った e イツカクが目についた。ひよつとしたらあつなかでは。洋介は座布団の穴に向かつて小さく舌を鳴らした。すぐに、ミャーという猫の鳴き声が聞こえた。

もう一度舌を鳴らしてやると、白い子猫が座布団の穴から顔をのぞかせた。手招きして呼んでみた。人なつっこい性格らしく、子猫はすぐに体をゆらせながら、洋介たちの前に小さく跳ねるようにしてやってきた。

ミャーと鳴いて体をすりつけてきた。

右足の先がなかったが、真っ白な毛に被われて傷口はわからなかった。隆が手をのばした。のばした手のなかに、子猫は左右に顔を振りながら何度もこすりつけてきた。両目を細めていかにも幸せそうな顔をした。

隆の両目がうるんでいるのを洋介は見た。両手を出して子猫を抱きよせた。子猫はおとなしく隆に抱かれてミャーと鳴いた。

隆の右手が子猫の右足をさぐっていた。なくなった傷の部分だ。さぐりながら傷跡を手のなかにすっぽりと包みこんだ。

隆の肩がふるえた。ミャーと子猫が気持ちのいい声をあげた。板張りの床にぼとりと何かが落ちてシミを作った。涙だ。子猫のなくなった右足の傷跡を、手ですっぽりと包みこみながら隆は涙を流した。

どんな思いの涙か洋介にはわからなかった。そつと後ずさつて、

「食堂にいるから」

受検番号	
------	--

とかすれた声を出してその場を離れた。鼻の奥が熱くなっていた。幸せなのか不幸なのかわからない思いだった。宿に入り、食堂の椅子に座ると、

「コーヒーでもいかがですか」

調理場から女将の声が聞こえた。

「いただきます。ありがとうございます」

すぐに熱いコーヒーが目の前に置かれた。

「隆君は」

「f おコトワリしなくて申しわけなかったですが、物置で猫を見ています」
座ったまま頭を下げた。

「あら、いいんですよ、そんなこと」

という女将に、) B (話をした。

「あの涙が私にはわからない。どんな思いをこめた涙なのかさっぱりわからない」

「それは……」

といてほんの少し言葉を切り、

「宝物を探しあてたうれし涙ですよ」

「宝物ですか」

「シロは隆君にとったら、かけがえのない宝物だと思いますよ。ようやく探しあてたんです。こんなことをいうとおこられるかもしれませんが、隆君は自分の姿をようやく見つけたんです」

「自分の姿ですか」

「シロは隆君自身なんだと思いますよ。同類に会ってうれしくて仕方がないんですよ。ひよっとしたら、シロのほうもそう思っているかもしれませんね」

女将はいつてからふわっとほほえんだ。気持ちのいい笑いだった。洋介はほんの少しかったが 久しぶりに幸福な気持ちを感じた。

「ひとつ頼みがあります」

女将の顔をじっと見た。

「帰りにまたよりますから、あの猫をゆずってもらえないでしょうか」

「それは」

といて女将はしばらく押し黙り、

「やめたほうがいいと思います。自分の姿は時々見るから心が安まるんです。毎日顔をつきあわせていけば苛立ちが出てくるような気がします」

「ああ……そうですね」

「いい考えがあります。シロが見たくなったら、隆君が自転車に乗ってここに会いにあげたいんです。そのほうが八ビリにもなるでしょうし」

女将はまた気持ちのいい顔でほほえんだ。

(池永 陽『ペダルの向こうへ』一部改めたところがある)

(一) 波線 a～f のカタカナを漢字に改めなさい。

a マいて

b セイシ

c ゲンミツ

d コウテン

e イツカク

f おコトワリ

(二) () に入るもっとも適切な言葉を次のア～オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア 遠慮気味に

イ 恥ずかしそうに

ウ あわてて

エ なげやりに

オ 明るい口調で

受検番号

(三) 傍線 「あんなに暗くなる」とあるが、これは隆のどのような様子を表しているのか。本文の言葉を用いて六十字以内で説明しなさい。(句読点を含む)

(四) 傍線 「心のなかで闘っている」とあるが、洋介は隆の「心のなか」をどう考えているのか。もっとも適切なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 右足の先がない猫が健気に生きている姿と自分の姿とを重ねて、今のままの自分でいいのかと問いかけている。
イ 困難に立ち向かって生きている猫がうらやましくもあり、一方で人なつっこくふるまう姿に反発を感じている。
ウ けがにも負けない猫のように強く生きたいが、まずは目の前の父親を乗りこえなければならぬと思っっている。
エ つらい境遇にあつてもたくましく生きている父親のことを思い、前向きに生きなければならぬと考えている。

(五) 傍線 「弾んだ声を出し」とあるが、なぜ洋介は「弾んだ声」になったのか。もっとも適切なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 明るくふるまうことでいつもよりも暗くなっている隆を元気づけ、はやく義足をつけさせてやりたかったから。
イ 洋介もかねてから猫を見たかったが、隆も同じ気持ちだとわかって二人で行くことができるのが楽しみだから。
ウ それまで返事もせず消極的だった隆が、洋介の言葉を受け入れて行動しようとしているのでうれしかったから。
エ 母親のおもかげと猫の姿を重ねている隆に、なるべく早く猫と会わせてやりたいと気がはやる思いがしたから。

(六) () に入る言葉を五字以内で答えなさい。

(七) () B () には洋介が女将に話した内容が入る。どのようなことを話したのか。本文の言葉を用いて二十五字以内で答えなさい。(句読点を含む)

(八) 傍線 「久しぶりに幸福な気持ちを味わった」とあるが、この時の洋介はどのような気持ちだったのか。本文の言葉を用いて六十字以内で説明しなさい。(句読点を含む)

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

一般的に、動物園に行く機会は、人生のうちで三回あると言われる。

一回目は、自分が子どものとき親に連れられて、二回目は自分が親になったとき子どもを連れて、そして三回目は自分がおじいちゃん、おばあちゃんになったときに孫といっしょに――。

動物園というのは、子どもが行くところという先入観が、今も根強くある。

私が動物園にaシユウシヨクした一九七三年当時は、現在と違って、子どもの数は多かったし、娯楽の選択肢も少なかったため、旭山動物園に限らず、どこの動物園にも子どもがたくさんいて、入園者数は伸びていた。

しかし、レジャーのあり方が多様化した八〇年代以降、全国の動物園は入園者数を減らし始めた。

旭山動物園も例外ではなかった。

私たちは考えた。

動物たちの素晴らしさがお客さんに伝わる動物園とは、どんな施設だろうか。何度も足を運びたくなる動物園にするにはどうしたらいいのか。子どもだけでなく、大人になっても行きたいと思うような動物園とはどんなところだろうか、と。

そして、飼育係が**ビーチガン**となって**アイデア**を出し合い、**試行錯誤**をした結果、いまの旭山動物園ができあがった。

水中をものすごいスピードで泳ぐペンギンの姿がまるで空を飛ぶように見える「ペンギん館」、透明な円柱のトンネルをアザラシが愛嬌たっぷりに、そして気持ちよさそうに泳ぐ「あざらし館」、大きなプールに豪快なダイビングをする様子がガラス越しに見られる「ほっきょくぐま館」、地上十七メートルの場所に取り付けられた水平のロープに片手でつかまりながら「空中散歩」をするオランウータンの姿が見られる「おらんうーたん館」……。

お客さんからは、「かわいい」というよりも、「スゴイ」「カッコイイ」といった、動物たちの

受検番号	
------	--

素晴らしさに感動する声が聞かれる。

その結果、二〇〇四年には、七月、八月の二ヶ月間に限った数字だが、初めて上野動物園の月間入園者数を上回り、年間百四十五万人の方が来園してくださった。

旭山動物園は、日本で最北に位置し、一年の半分近くを雪に閉ざされ、交通のアクセスもけっしていいとはいえない。しかも、上野動物園のパンダのような「珍獣」もない。百五十種近い動物はいるが、どこの動物園でもみることができない動物がほとんどである。

単純に考えれば、不利な条件が少なくない。しかし、そうした条件を不利だとは考えなかった。私たちは、上野動物園にはなれないし、なる必要もないと思う。不利な条件も、知恵をしぼれば克服できるはずだ、と考えたのである。

(中略)

「旭山動物園には、上野動物園のように、パンダなどの珍獣がいるわけでもないのに、どうしてこれだけの人気が集まったのでしょうか」

よくそんな質問を受ける。

ペンギン、アザラシ、ホッキョクグマ、オランウータン、ニホンザル、ゾウ……、旭山動物園にいる動物は、どこの動物園にもいる種類だから、そういう質問ができるのも当然といえば当然だろう。

質問に対する答えを一言でいえば、「見せ方を工夫したから」である。それまでの動物園は、動物の姿形を中心に見せてきたが、その方法を根底から変えたのだ。

見せ方と言っても、動物に「曲芸」をさせるわけではない。「曲芸」をさせて、「お上手、お上手」と喜んだとしても、人はその動物を「ソッケイ」するわけではない。無理やりさせられているとしたら動物は辛いだろうし、その動物の素晴らしさを伝えることにはならない。

私たちが何よりも優先して考えたのは、その動物にとっても特徴的な能力を発揮できる環境を整えることである。

ペンギンはただ歩かせると人間よりもおそいし、ヨチヨチ歩きで、どことなくたよりない。しかしいざ水中に入ると、おどろくほどのスピードで、まるで空を飛んでいるように泳ぐ。ペンギンは空を飛べない鳥の代表だが、水中トンネルではやはり鳥類なんだと改めて納得する。

ホッキョクグマは、その迫力と泳ぐときの毛並みの美しさが特徴だ。

ほつきよくぐま館には大きなプールがあり、ときには透明なガラス越しに見える人間をめぐって飛びこむ瞬間を目にすることができる。ちょうど見ている人の視線に飛びこんでくるので、その迫力に思わずのけぞる人も多い。

アザラシは泳ぎがうまい。あざらし館の透明な円柱トンネル(マリンウェイ)では、その秘密がよくわかる仕組みになっている。これまでの動物園では、アザラシは水槽の上からしか見ることができなかったのですが、どのようにして泳いでいるのかがわかりにくかった。しかし円柱トンネルをつくることで、三六〇度、あらゆる角度からアザラシが泳ぐ姿を観察できるようになったのである。

オランウータンの空中散歩も人気である。
オランウータンの握力は強い^{あつく}ため、たとえ高さ十七メートルの場所に置かれても、水平に張られた長さ十三メートルのロープを片手で軽々と渡^{わた}っていく。

強い力といえば、チンパンジーも力が強い。以前、チンパンジーと人間で綱引きをさせたことがあった。大の大人が三人かかっても、チンパンジー一頭にはかなわないことがわかった。この企画はdタントウの飼育係が定年でいなくなったので、いまはやっていないが、負けた側の人間は、チンパンジーの力を実感できたはずである。

一方で、動物園の鳥といえば、羽を切って飛べない状態で展示しているケースが多い。しかし、三千平方メートルはある「とりの村」は、地上十四メートルという高さにあみを張って、巨大な鳥かごにしたのだ。ここでは、鳥たちが堂々と羽ばたいて飛んでいる。これだけのスペースがあれば、人間が近寄ってきてても、安心して逃げられるという余裕から、鳥たちが人をこわがらな

いため、間近で観察できるし、カッコよく飛ぶ姿を見ることが出来る。

受検番号	
------	--

こうしたそれぞれの動物の持つもつとも特徴的な動きなどを見せる展示の仕方を、「行動展示」と名付けた。参考のために記すと、動物たちの姿形で分類して、おもに檻おりに入れて展示するという従来からある展示方法を「形態展示」と呼ぶ。

私たちは、動物それぞれの能力を發揮できる行動展示を行うことで、動物がイキイキすることを、飼育する中で確認かくにんしてきた。

また、イキイキする動物をみることで、人間の側もうれしくなり、元気になることも、入園者の声を聞いたり、表情を見ていてわかった。

野生動物と向き合い、園長として動物園のスタッフをみていて思うのは、動物も人間も、「自分らしさ」を發揮できる環境はなにものにも変えがたいということである。

(小菅正夫『旭山動物園 革命』一部改めたところがある)

(一) 波線 a～d のカタカナを漢字に改めなさい。

a シュウシヨク b イチガン c ソンケイ d タントウ

(二) 傍線「動物園に行く機会は、人生のうちで二回ある」とあるが、これは動物園をどのような所と考えた言葉か。もつとも適切なものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア 動物園は、子どもが一人で行ってはいけない所。

イ 動物園は、人生を通して十分に楽しめる所。

ウ 動物園は、大人が楽しむことができない所。

エ 動物園は、一回行くだけでは不十分な所。

オ 動物園は、必ず誰かといっしょに行く所。

(三) 傍線「レジャー」とはどういう意味か。それを表している言葉を本文中から抜き出さない。

(四) 傍線「試行錯誤」をもつとも適切に使っている文はどれか。次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア 友達に借りた本を汚してしまい、試行錯誤をした。

イ 彼女は試行錯誤をくり返し、彼かれとけんかをした。

ウ ペットを飼うかどうか、家族で試行錯誤をした。

エ テストで試行錯誤をしまい、満点ではなかった。

オ 試行錯誤を重ねて、おいしいシチューが完成した。

(五) 傍線「動物たちの素晴らしさに感動する」とあるが、

() 次のA～Cの動物の場合、どのようなことに感動するのか。それぞれ二十字以内で答えなさい。(句読点を含む)

A ペンギン B オランウータン C ホッキョクグマ

() 「動物たちの素晴らしさに感動する」と人はどういう状態になるのか。本文中から十二字で抜き出さない。(句読点を含む)

(六) 傍線「不利な条件」とあるが、それはどのような内容か。五十字以内で答えなさい。(句読点を含む)

(七) 傍線「見せ方を工夫した」とあるが、

() 旭山動物園では見せ方をどのように変えたのか。五十字以内で答えなさい。(句読点を含む)

() () のように変えるとき、旭山動物園の人々がもつとも大切にすることは何か。本文中から三十字以内で探し、最初と最後の五字を答えなさい。

(八) 傍線「『自分らしさ』を發揮できる」とあるが、その反対で、自分らしさを發揮できていない例を本文中から十字以内で抜き出さない。

受検番号	
------	--

